

——ハッハッハ……

《ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ……！》

(歩く音)

《ざわざわざわ……ぎーぎー……ざわざわ……》

(森のざわめき)

むわつと熱気の籠る田舎の夜の森の中、一人でキャンプに来て迷ってしまった“あなた”が街道を探し彷徨っている。

呼吸は荒く、すでに数時間彷徨い続けているためにずつしりとした疲労感が全身を襲っていた。重く歩みを鈍くさせている足を一步一步と踏み出すが、周囲からは虫や鳥の……何より大型の獣のモノらしい声が聞こえてきて“あなた”の精神を追い詰める。

だからこそ小さく喘ぐような息を繰り返しながら、“あなた”はがむしゃらにただただ機械にでもなつたように棒になつた足を振り回し、歩みを続けていた)

《コツツ……》

(何かの歩みが止まる音)

森の中。

寂れた廃寺のような場所の前で“あなた”の発する音を聞き取り足を止める和装の少女が一人。その頭には髪の毛と同じく銀色の獣のような耳と、その和装の下からは同じ色のふわりと大きく広がった尾っぽが顔を覗かせている。

????

「ん……なんじゃ、この物音は？ ……獣のものではないの。

まさか……人か？ じゃが、もうバスが通っておる時間でもないし、人がこんな奥に……しかも、ワシの人避け呪いを強いておる場所に近付いてくるなど……」

——ハッハッハ……

《ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ……！》

近付いてくる音に、少女が訝しげな顔を見せた。

夕食の材料にでもしようとしていたのか、載せた食材ごとザルを床へと置き、周囲に視線を配る。

????

「……近付いてきておる、のか？

よもやアヤカシ狩りの検非違使(けびいし)の類か？

いや……それこそまさか。今の世に、人を害する程の力を持ったものなどそうおるまいし。もしそうであるならば、ワシの所になぞ尚の事来るはずが……」

《ガサツ……！！》

(草むらが掻き分けられる音)

????

「くやんっ!？」

なっ、まさか本当に人……かの？

どうやってここに、というか……そんなボロボロの姿はどうした?!

ワシを害しに来たという訳でもなさそうじゃし……一体何用じゃ?」

突然草むらから顔を覗かせた“あなた”に少女が驚いた顔を見せる。

だが息も絶え絶えといった様子の“あなた”にすぐに戸惑いの色を見せ少女は問いかけるが、

“あなたは歩き疲れフラつく足をしながらも……その少女の頭と尾にある人ならざる部位を見て、目を丸くし……一歩、後ずさつてしまう。

《……シリ》

(後ずさる音)

???

「なっ……お主、何故後ずさる?」

そんな体でまた森の中を彷徨おうものなら、それこそ獣の餌になるぞ!

んっ……なんじゃ、お主のその目は? ワシの頭に、何か付いて………あっ」

少女が“あなた”の目線に何か気付いたように手を頭にやる。

そして自身の銀色の耳に触れると、やつてしまったといった様子で顔を歪めた。

“あなたはそれを見て、ガクガクと震える足で元の道を戻ろうとするが、それは産まれ立ての小鹿のものよりも頼りない足取りであり、遅々として前に進まない。

???

「ああ、これっ! お主、待たんか!? そんな体で無理に歩こうとするでない!

ええい……こんな所で人に出会うなどと思うておらんかったから、人化の術をかけ忘れておったかつ!

うう……む、見てみぬフリでもすべきか? じゃが……流石に、このままの野垂れ死ぬか獣の餌になるのを見過ごすのは……うう、……ええい!」

逃げようとする“あなた”の様子に、少女は悩むように唸り声をあげたが。

頭を振り意を決めると、近くに落ちていた木の葉を一枚拾い上げ、中指と人指し指の間に挟み口元へと近付ける。

???

「くう……おんっ!」

《ぼっ……!》

(青白い炎が“あなた”の前に現れる音)

《どさ……》

(炎を見た“あなた”が地面へと倒れる音)

小さく鋭い叫び声をあげたかと思うと、“あなた”の前に青白い火球が突如現れる。

その炎を見た瞬間、急に辛うじていいた意識が揺さぶられ、そのまま崩れるように“あなた”

は倒れこんでしまう。

???

「ふう……まだ人にこの程度の術が効くぐらいには力は残ってくれておったか。  
……頭などを変な場所に打ち付けてはおらんじやろうな？」

《ぎっぎっぎ……》

（“あなた”に近づく音）

《す……》

（倒れた“あなた”に触れ、傷がないか確かめる音）

???

「ふむ……大丈夫そう、じゃな？」

良かった……許せよ。

ワシの不注意もあったが、今のお主をそのまま放り出してしまう方が危なかったのじゃ。  
介抱はさせて貰うから、それを侘びとさせておくれ……。

んっ……しよと！」

少女は意識を失った“あなた”に、申し訳なさそうに声を掛け、腕の間に頭を入れる。  
そしてそのまま廃寺の中へと、“あなた”を支えるようにして入っていくのであった。